



タイトル ほんとうの環境白書

著者 池田清彦 (いけだ きよひこ)

出版社 角川学芸出版

発売日 2013年8月25日

ページ数 206頁

本書は、「プレジデントファミリー」誌に「池田教授のエコロジ評」として2008年～2012年、「教えたくなる科学の話」として2012年～2013年までに毎月連載したコラムをまとめたものである。

コラムは、話題ごとに9つの章にまとめられており、章の終わりに「追記と検証」と題して、最近の事実からコラムの不足を補足している。

テーマは、「新エネルギー」、「食糧」、「人口爆発」と人間の未来を左右する3つの問題を地球規模で取り扱っている。

文章構成は以下の通りである。

- 第1章 原発マフィアの詭弁に騙されない・・・身を守るために知っておくべき実態
- 第2章 来るべきエネルギー政策・・・低コスト・安全・多様なエネルギー源の開発を
- 第3章 環境政策の落とし穴・・・現実的で経済的な政策へ
- 第4章 破綻した温暖化論・・・むしろ真逆のことが起きている
- 第5章 天空と地球内部で何が起きているか・・・本当の危機と危険を考える
- 第6章 パニック・・・動物から人間への黙示録
- 第7章 本当の自然保護とは？・・・生物多様性の為に人間ができること
- 第8章 この自然を身よ！・・・想像を絶するほど複雑で、突拍子もないこと
- 第9章 創造的エコロジー宣言・・・環境問題の、こんな解決策もある

面白そうなところを少しピックアップしてみよう。

日本の「イルカ漁」を隠し撮りした米アカデミー賞受賞映画「ザ・コーブ (入り江)」の話である。著者が本映画を見た感想を述べている。

狭い入り江が「イルカ」の血で赤く染まる映像を観れば、「かわいそうに」と思う人は多

いはずだ。そういう意味では、反イルカ捕獲キャンペーンとしては成功だったのだろう。

しかし、同様に、「牛」や「豚」を屠殺する場面を撮った映画を観れば、多くの人はこれらの動物を「かわいそうに」と思うであろう。アメリカでは屠殺場面を撮った映画はあるそうだが、アカデミー賞は受賞しなかったようだから、「ザ・コーブ」の受賞は、政治的バイアスがかかったからに違いない。

最近の生物学が明らかにしたところによれば、「クジラ」や「イルカ」に最も近縁なのは「カバ」だという。すなわち、「クジラ」や「イルカ」は「偶蹄類」というわけである。だから、「クジラは食べてはいけない」などという意見には何の根拠もない。欧米人は、「飼育動物は人間が作ったものだから食べても良いが、野生動物は神が作ったものだから食べてはいけない」といった屁理屈を言う論者もいるが、本当のことを言えば、野生動物を食べる方が、エコロジカルなのだ。

生き物が飼われている牧場は、もとは自然生態系であったものを、野生動物から棲みかを奪って作ったものに過ぎず、そこに棲んでいる野生動物たちは永久に生存権を絶たれてしまったのだから、野生動物を持続可能に利用する方がエコロジカルに決まっている。

問題は世界人口 68 億人を養うためには、野生の動植物だけに頼るわけにも、飼育動物だけに頼るわけにはいかないことだ。つまり、何を食って良いか悪いかといった論争は不毛なのである。……。

ロンドン・オリンピックの陸上男子 100 メートルと 200 メートルは、ウサイン・ボルトが優勝し、オリンピック史上初の 2 連覇を成し遂げた。ボルトの走りを見ていると、日本人とは走る能力に生まれつき差があるような感じがする。「走りの遺伝子」が違うんじゃないのと思った人も多いはずだ。

事実、「運動能力に関連する遺伝子」は 80 種類以上知られており、これらの遺伝子の組み合わせにより、遺伝的な走力は決まってくるという。

瞬間的なパワーを出す「速筋」の形成には「ACTN3」と呼ばれる遺伝子が深く関与していると見られているが、この遺伝子のタイプは民族によって多少異なっているという。この遺伝子のタイプを調べると、ジャマイカ、アフリカ系米国人は 9 割以上が「RR 型」か「RX 型」であるという。日本人は、彼らには殆どいない「XX 型」が約 2 割を占めるという。……。と話を続け、将来サイボーグ・オリンピックがやって来るのではないかと危惧する。

地球の気温は、「太陽から届くエネルギー」、「温室効果ガス」、「雲の量」など多数の要因で決まるが、いずれにせよ太陽からのエネルギーが気温を保つ究極原因であることに変わりはない。

IPCC (気候変動に関する政府間パネル)の報告書のデータが捏造されたとの疑惑が発覚した。「ウォーターゲート事件」をもじった「クライメイトゲート事件」である。イギリスの「タイムズ」やアメリカの「ニューヨークタイムズ」、CNN などのテレビでも報道されたが、

残念ながら日本の有力テレビや大新聞では報道されなかった。そんな中で、産経新聞のみが「IPCC」報告書 疑惑と誤り 信頼回復急務」と報じた。

IPCCは20世紀の間に地球の気温は0.6℃上昇し、その原因は主としてCO₂の人為的排出だ、と主張してきたが、その基となる生データは、地球上の各地に置かれた温度測定ステーションの測定値である。IPCCの捏造疑惑は、IPCCに気温データを提供している研究所CRUのプログラマーのメモが流失したことから発覚した。

そのメモには、「データベースには何百というダミーのステーションが登録されている。しかも同じステーションのデータがダブルカウントされている。何てこった」と書かれていたという。ここでは、「破綻した温暖化論」として紹介されている。

一方、太陽の活動が200年ぶりに低水準に落ちているという。このまま太陽の活動が低下し続けると、温暖化どころか氷河期の到来の心配をした方が良くのではないかと著者は危惧する。さて、どう考えるのが正しいのだろうか？

著者の趣味は、「虫採り」で特にカミキリムシの研究・収集家として有名である。

ナガサキアゲハやツマグロヒョウモンといった南方のチョウは、ここ10年くらいの間に凄まじい勢いで北方に分布を拡げている。何でも地球温暖化のせいにしたがる環境省やNHKは、こういう現象の原因をすぐ温暖化に結び付けたがるが、そんなに単純ではない。

モンキアゲハとナガサキアゲハの例、ツマグロヒョウモンの例を挙げ、人為的な原因があるのではないかと疑問を呈する。

また、ルリボシカミキリのように寒いところから暖かいところにやってきて増えている例もある。これは温暖化では全く説明不能であり、自然現象は複雑で、たった一つの原因で説明出来るほど単純ではないのである。……………。

iPSのiが大文字でなく小文字なのは「多くの人に研究に親しんでもらえるよう米アップル社のiPodにちなんだ」と山中教授が語っている。茶目っ気たっぷりの先生だ。

iPS細胞への期待と題して脳死臓器移植といった問題のある医療に代わり、iPS細胞由来の人工臓器が普及し、多くの難病が治療可能になることを期待しつつも、先端医療が進めば、医療費もかさみ、社会が膨大な医療費負担に耐え切れなくなると、金持ちだけが恩恵を受けることになりかねない。医療の発展ばかりでなく、そうならないための社会システムの構築も大事であると述べている。……………。

「生物多様性のために人間ができること」では、本当の自然保護とは何かについて言及している。

生物多様性などには多くの人あまり興味を持たず、保護や保全を担うはずの保全団体や行政もまた、保護や保全のアリバイ作りに腐心するのみだからである。保全団体や行政は真の有効性を考えない施策を行うため、種の保全に逆行する愚挙としか言いようのない

事態が日々、進行している。筆者の身近な所でもこういった事態が進行している。

などなど、今まであまり深く考えなかった話題や著者の解説の中で迷子になりそうな話題も多く、大いに知的な刺激を受ける環境白書になっている。

ただ、短い文章にまとめられているので、肝心の情報が抜けており誤解を招く箇所も多い。この点は、読者も注意して読んで欲しい。

いずれのテーマも「正論や正解に騙されるな、自分でしっかり考えよ」というメッセージに溢れている。一つのテーマが2~3頁にまとめられているので、読みやすい構成になっている。

2013. 10. 21